

木は育ち、そして森になる

高須奈緒美（国際交流基金ローマ日本文化会館館長、養フランス、86 卒）

「あんたのやってるのは『虚学』だからね。あたしらの実学とは違うのよ」

就職どうしよう。ぐずぐずと迷っていた大学4年のころ、経済学部友人の無邪気な言葉に自らの「志」のなさを見透かされた気がして、私はちょっぴり落ち込んだ。とぼとぼと踵を返し、すがる思いで参加した「さつき会」就職セミナー。国際交流基金で働く先輩もゲストスピーカーのひとりだった。文化芸術、日本研究、日本語教育を事業の柱とし、世界の人々を文化でつなぐ。「人に始まり、人に終わる」文化交流。ああこんな職場があるのか。虚学の面目ここに極まれりと、ほとんど一瞬にして恋に落ちた。1985年の春のことであった。

元来人とその暮らし、その底流にある普段着の文化に興味があった。外国か日本かには不思議なほど無頓着だったかもしれない。さまざまな時代に、場所に、人々に、序列や優劣なく併存するたくさんの「文化」。その未知なる魅力の発見には、いつも心躍るものがあつた。文化に魅せられのめり込んだ研究者たちの情熱、自身ではとてもその域に達することのできないそれぞれの境地に、もっと近しく触れてみたいという知的欲求もあつた。教養学科フランス科に進んだのも、民衆の生活史・精神史としての歴史や文化人類学に惹かれたからであつた。

もとより虚学の徒である。社会変革とか意識改革とかへの実学的な志も技量もない。ただ、「間違っているから直す、知らないから教える、乏しいから足す」という考えが通用しないのが文化というものじゃないか、「霞食って」とか言うけれど、知的好奇心だって人が生きるために欠かせない栄養素だ、というふわふわした確信みたいなものはあつた。

さて、突然の「恋」をどうにかこうにか実らせて国際交流基金に就職し、はや30年。就職するまでパスポートすら持っていなかった私が、いまやベルギー4年、フランス3年半、セネガル2年半、米国1年、現在のイタリア

ももうすぐ半年と、通算で 12 年近く海外勤務しているのだから、人生とはわからないものである。因みに独身だったベルギー以外はすべて単身赴任。電話→FAX→Email→スカイプと、日本の夫との通信手段は回を追うごとに進歩したが、引越技術は一向に上達していない。毎回大さわぎだ。

海外ならではの経験は枚挙に暇がない。例えば大学時代からの憧れのレヴィ＝ストロース。1977 年に国際交流基金が初めて日本に招へいした。20 年後の 98 年、パリ日本文化会館での「縄文展」開催にあたり、向こう見ずにも日本から送ってもらった縄文図鑑を付箋だらけにしてご自宅を突撃し、カタログの序文をゲット。オープニング当日、「早く読みたいから」とカタログを小脇に抱え、颯爽と地下鉄の駅に吸い込まれていった 90 歳の後ろ姿は忘れがたいものがある。そして 2002 年には国際交流基金設立 30 周年にあたり、当時私が担当していた雑誌『国際交流』記念号に、再び深い含蓄のあるエッセイを寄せてくれたのだった。

あるいは樂吉左衛門さん。門外不出、日本でも開催されたことのない初代長次郎から当代十五代までの樂歴代 400 年の作品展が、最初に実現したのはイタリアとフランスであった。パリでのオープン前日、深夜まで会場設営に悪戦苦闘し、作品もすべて並べ終え、いざ仕上げに高さ 4 m を超える最後の嵌め殺しのガラスでケースを閉じようとしたら、何と幅が 15 cm 大きすぎて入らない。急遽ガラスを巨大なベニヤ板に横たえてカッターで切れ目を入れ、ガソリンをそろりと流して点火。燃え上がる炎の溝を一気に切り離し、ようやく設置したときにはすっかり夜が明けていた。その 17 年後、今度はロサンゼルスに再び樂さんを迎え、カウンティ・ミュージアムで樂歴代の展覧会を開催するようになるとは、露だに思わぬ若き日のひとこまであった。

国際文化交流の醍醐味は、人と人をつなぐ長いプロセスの創造にある。回路のつなぎ方、種の蒔き育て方で、さまざまな電流が流れ、色とりどりの花が咲く。それは美しい魔法の絨毯のように、私たちの予想や期待をはるかに超え、時空を超えて広がり、何十年もたって再び巡り、つながり直す。蒔いた種が育つための養分は、すべての人の知的好奇心と感動する心。恵みの

雨は、それをつなげ、化学反応を起こす豊かな表現力と発信力。つまり、私たち自身が触媒・カタリストとして常に学び、面白がる心と素直に感動する感性を失わず、熱く感動を語り、「誰とでも」共有できる豊かな言葉を持たなければいけない。おっとり刀で日本と日本文化を背負って外国に切り込んでも、森が育つことはないだろう。私たちは種蒔く人であると同時に、その土地に雨を降らせ、種が芽生え、木に育ち、森になるのをわくわく・ハラハラして見守る「楽しき農夫」のようなものかもしれない。

ああ、それにしても、30年たってもちっとも進歩しない青臭いままの私。さつき会が与えてくれた「志」に感謝しつつ、日伊国交150周年を迎えたローマで、いまでも霞を食らい続けている。